

## 第四話

### 第三項「わが教団は、正しく・楽しく・仲よく 人間味の豊かな人々の家庭である。」

第三段は、禅の修行に打ち込み人間形成の道を行ずる人が、究極において到達すべき境涯を明らかにし、進むべき人間形成の究極の目標を示したものであります。

また世界楽土建設のローカルなモデル・模範として、教団のあるべき姿を明快に示している一段でもあります。

「正しく・楽しく・仲よく」という言葉は、小学生でも判る平易な言葉であります。しかしその意味するところは、法の淵源を極め、人間形成を深く積まなければ達することの出来ない、深い境涯から発したものであります。この一段は、耕雲庵老師のひとりとなりの全貌といっても良いでしょう。

正しくあるとは真理に合掌することであり、楽しくあるとは自己に合掌することであり、仲良くとはお互いに合掌することあります。

まず「正しく」とは、世間での法律的にとか、道徳的にとかの正しさではありません。お釈迦様が暁の明星を徹見して開かれた悟りそのものであります。

お釈迦様が悟りを開かれた時、「天地と我と同根、万物と我と一体！」と叫ばれたその絶対の見地が、この「正しく」であります。これは仏教のみならず、全てのほんとうの宗教の根源であります。

昨日、転迷開悟のところでの説明で、「はかない命の人間に、即永遠の命が宿っている」と申しました、その「永遠の命」すな

わち「本来の面目」そのものが「正しく」の当体であり、仏教用語で云いますと「如是の姿」であります。

禅門に入って見性するという事は、これがはっきりと掴めるということでもあります。これは、文字や言語で顕されるものではなく、三昧になって到ることのできる絶対の境地であります。

「正しく」とは、今もいった通り「真理に合掌する」ことであるが、真理とは法（お釈迦様の悟り）であります。「真理に合掌する」とは、本来の面目（真理）を徹見し、是を日常において自由に働かせることでもあります。

世間の法律的とか道徳的な正しいことは、畢竟は人間が作り出し考え出したものであり、時と場合によっては、法も多数決によって改変せられ、道徳の規準も時代によって大きく変わるものがあります。

然るにここにいうお釈迦様の悟り（他の宗教に共通する宗教の根源）は不変不易であり、時代によって国柄によって左右されない真理そのものであります。だから、これを把握し、その通りに実行するのが、時代の価値観で変わったり、人為的に改変されることのない「一番正しいことである」といっても敢えて過言ではないでしょう。

「楽しく」とは、これも世間の中での苦とか楽とかではありません。先に、「楽しく」とは、自己に合掌することであると言いました。自己に合掌するとは、自己の仏性に合掌する事でありませぬ。端的にいうなら見性成仏することでもあります。これがほんとうの（Buddha）（仏陀）に帰依したというものであります。ここに於いて始めて、法喜禅悦を感じ報恩・感謝の念が起こるのです。これ程楽しいことはない。

耕雲庵老師曰く「一体、人間がこの世に生棲する上に於いて、完璧とか充足とか大成とかをもって楽しいと考えるならば、恐らく永遠に楽しいと感ずる時はないでしょう。そこに宗教の世界が

展開せられるので、宗教ではありのままの姿に法喜禅悦を感じ、現状に於いて報恩感謝の念を生ずるのであります。つまり“それでよいのじゃ”と満足するのであります。他力的に言えば、何も彼もお任せするのであり、自力的に言えば、悟了同未悟に徹するということであり、これをつまり仏に帰依したといい、自己に合掌したというのであります。これが真の満足であり、ほんとうに楽しいことなのです。」

「正しさ」すなわち見性の端的を踏まえて、万縁万境に従っておこる状況の中で、随所に主となる自由なはたらきを自らの味わいとして「楽しく」といったものであります。見性悟道の境涯が進むに連れて深まる正念相続において、おんのりと嘯みしめられる生き甲斐でもあります。

瓦釜集にもある金剛経「応無所住而生其心」や雲門大師の「日々是好日」の日常に於ける実践の中での納得が「楽しく」であります。

山岡鉄舟居士の歌「晴れてよし曇りてもよし富士の山もとの姿は変わらざりけり」の中での、「曇りてもよし」とは、娑婆世界では、順境の時ばかりはない、むしろ逆境の時代といっても良いかもしれないくらいなご時世であります。そういうときにも、風流ならざるところ「也風流」と事態を嘯みしめて云えるかどうかであります。これは容易に手に入る境涯ではありません。

すなわち、この「楽しく」は、世間の苦・楽を越えたものであり、盤石の悟りの境涯からの日常の自分自身に対する肯定（如是、如是）の味わいであります。盤石の悟りの境涯とは、まさしく「正しく」であり、ここの「楽しく」はよほどしっかりした「正しく」に裏付けられていなければ、味わえないものであります。

自分に癌の告知をされたとき、「也風流！」と正受できるかどうか？最愛の我が子に先立たれることもあり、手を取り合って苦楽を共にしてきた伴侶との別れもあり、多くの従業員を抱えた事業がこの不況の中で立ちゆかなくなった状況になっても「也風

流！」といえるかどうか？

もちろん悲しいときには思いっきり泣いたらいい。その悲しみもまた味わうということであります。

この境涯は、人間形成の自利の究極の境涯であると云えます。

「仲よく」とは、法理的には、この世の人も物も全てを含め、それぞれ差別のあるがままの事事無碍法界の世界の有り様をさしており、ほんとうに「仲よく」できる人の境涯とは、見性了々底の観音菩薩の高い境涯になるのであります。

「仲よく」の基盤は、「五蘊皆空」の第一則「いかに色蘊を空ぜん」がその基盤であります。すなわち、自と他の間の畦が切れていなければ、ほんとうの「仲よく」は皮相的、道徳的になってしまいます。すなわち、「仲よく」はお釈迦様の悟りの当体である「正しく」に裏付けられているものであり、「正しく」とこれも切り離せないものであります。

耕雲庵老師は、また別のところで、「仲よく」が一番難しい。どうか末永く教団団員は、仲よくしてくれ！それを祈念する。と  
いっておられます。

「正しく・楽しく・仲よく」の集大成が「仲よく」に現れるということでありましょう。教団の中、支部の中、夫婦間において「仲よく」を見れば、禅者の真贋を見ることができるといえるものであります。そして豊かな仲の良い友人・人脈がその人の周りにあるか無いかは、その人の人間の香りと有徳の証として、この「仲よく」の境涯が、覗かれるものであります。

かくの如く、「正しく・楽しく・仲よく」は、平凡な平易な言葉ではありますが、それぞれの深い宗旨を含んでおります。そして三様の宗旨を持ちながら、極めて密接な関係にあるのであります。正しくあるから、心の底から自分をうけがえることの出来る楽しさになるのであり、正しくあるから自分と同じように相手に

も仏性を認めることができ、心の底から相手に合掌して、ほんとうの仲よくが可能になるのであります。またほんとうに自分が楽しさを噛みしめること無しに、仲よくは出来ないものであり、仲良くできないで自分一人だけで、ほんとうの楽しさが味わえるはずはないし、仲良くできていなくて自分は正しいとは絶対にいえないのであります。

このように、この三つは密接に関係があります。関係があるというより、元来、この三つは、実は一であり、分けることが出来ないものであります。

正に耕雲庵老大師の深い悟道の境涯に裏付けられており、幽遠な玄旨が秘められているのであります。

ほんとうにこの「正しく・楽しく・仲よく」の玄旨に徹し、耕雲庵老大師に親しく相見したくば、200則の瓦笏集の第197則目「英山三転語」【如来は娑婆往来八千遍，大通智勝仏は十劫坐道場と。何れか親，何れか疎，諸大徳 弁別せよ，看ん。

盲人も夢を見，聖人は夢を見ずと。未審し，明眼の人 還って夢を見るやまた否や。 佛祖は衆生を度し，石橋は驢馬を渡す。且らく道え，大力量の人 箇の何をか度せん。】を透過し、日々において脚實地に、それを吾が物にすれば、親しく相見できるというものであります。

次に、「人間味の豊かなひとびとの家庭である」というところですが、（最初の人間禅の精神について最初の日はこの言葉は出ており説明しましたが、もう一度、）耕雲庵老大師自身の言葉を味わってみましょう。

「吾が教団は、夫婦親子生活の情味も知らぬ世棄て人や、生活に預かる術も知らぬ有閑人の集まりではありません。飽くまで人間社会を基盤とした人間の集まりであります。……飽くまで正しく、楽しく、仲良く暮らすのが、ほんとうの人間の在り方で、之

を私は「人間味」と申すのであります。吾が教団は、此の人間味の豊かな暖かい家庭であることを、その特徴の一つと致します。」と述べられています。

これは言葉を換えれば、出家では人間味が豊かにということはいえないということであり、人間の自然として、ほんとうの人間のあり方として、あくまで人間社会の中に根ざした居士・禅子が、ほんとうなんだということであり、これからの時代のほんとうの宗教のあり場所は、市井のど真ん中での生活者の中にあるということであり、出家・脱俗を正規としてきた仏教の歴史の上から見ると、時代を画する革新的宣言であります。

古来禅門では法の上において人情を涓滴も施さぬことを以て真骨頂としてきました。そのために誤解されて、現実離れのした人間味のない悟りすました人間がイメージされがちでした。たしかに法の上において、厳乎として厳なるのが真の親切であり、そうでなければ人物を叩き出すということではできないのであります。これは古今一貫して変わるものではないのですが、是は参禅弁道に於ける室内のことであり、そのために日常においても人間味のない人物となったのでは本末転倒であります。この一段の示すところは、このような誤った人間像を拂拭して、人間形成の本来の姿を示し、ほんとうに人間らしい香り高い人物像を打出しているのであります。

最後のところの「家庭である」の結びも、留意しておかねばならない含蓄があります。家庭というものは、家族ですから、嬉しいにつけ、悲しいにつけ、みんなでそれを共有するものであります。家族の中に困ったことが生ずると、みんなで助けるのは当然のことであります。そして「家庭である」のフレーズの前に「わが教団」が懸かっているのであります。卑近な話、結婚したい若者がいたり、昨今の不況の中で就職探しに困っている者が居れ

ば、年長者や先輩が親身になって心配してやったり、落ちこぼれ  
そうだとか、悩む子がいれば、お姉さんやお母さん代わりが話を  
聞いてやって立ち直らせてやるのが、家庭であるところの教団の  
あるべきようではないでしょうか。

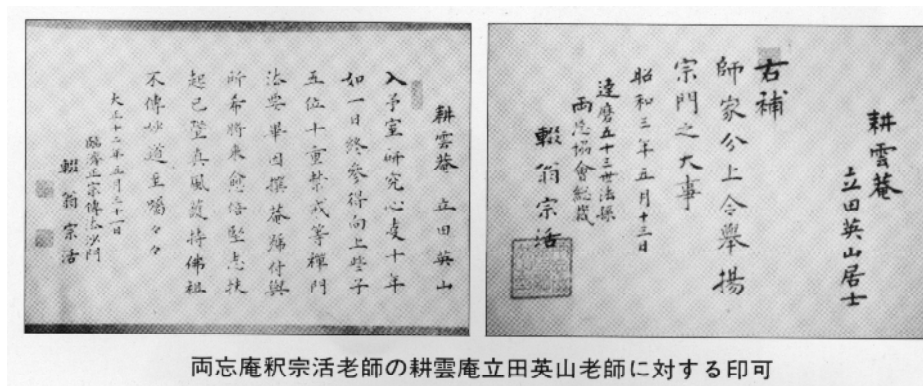
当に、最初に触れましたように、世界楽土建設の足下において、  
ローカルで狭い範囲ではありますが、そのモデル（模範）を教団  
内に実現するということが必要であります。教団内で、支部内で、  
正しく、楽しくを踏まえた総決算としての「仲よく」が実現しな  
いのに、広く大きな世界楽土建設が出来るはずはないというもの  
であります。

教団が、支部が、ほんとうに「正しく・楽しく・仲の良い家  
庭」にならずして、世界楽土を建設することはできません。

大いに自戒し、反省をしなければならぬと考えます。しっか  
りこの一段を教団の中に実現しないことには、耕雲庵老大師に顔  
向けができないというものであります。

「わが教団は、正しく・楽しく・仲よく 人間味の豊かな人々の  
家庭である。」

今日はここまで。



兩忘庵積宗活老師の耕雲庵立田英山老師に対する印可